焔喰い（ほむらくい）

ハレルヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
焔喰い（ほむらくい）

【Ｎコード】
Ｎ６００６Ｐ

【作者名】
ハレルヤ

【あらすじ】
「お姉さん、今までに何人殺した？」
小さな男の子の何気ない質問からはじまる奇奇怪怪な物語です

序章

そのとき、彩香は日課のジョギングをしていた。いつものコースを走り、いつもの公園のベンチで休憩をとっていた。水分補給のためのスポーツドリンクを飲み終わったとき、目の前に子供が立っていた。見た目は１０歳ぐらい。小学校高学年か。じっと彩香を見つめていた。ベンチには彩香１人。周りを見ても他に人はいない。

「迷子？」

そんなことを考えている彩香に男の子が笑い顔で話しかけた。

「お姉さん、今までに何人殺した？」

それがナオキとの最初の出会いだった。

彩香の顔から表情がなくなった。すばやく、ウエストポーチに手をいれ身構える。

男の子の姿は消えていた。周りを見回すがどこにもいなかった。彩香はウエストポーチから手を取り出した。

「なに、あの子」

まさに、狐につままれたようなそんな出来事だった。

彩香はベンチから立ち上がり、また走り始めた。周りを注意深く探ったが、その日はもう、その男の子には会うことはなかった。

彩香は仕事場に戻った。彼女の仕事はカスタムナイフの製作者。世界的にも有名な作家だった。洗練されたデザインはもとより、その切れ味のよさが人気の秘密だった。特にさやかのナイフを世界中に知らしめたのはアメリカで起こった１６人連続殺人の犯人が愛用していたという噂が流れてからである。いまや、彩香のナイフは一本百万から二百万の値段がついている。

彩香とナイフの出会いは大学生の頃。付き合っていた彼氏が大のナイフ好きでよくナイフの専門店に顔を出していた。

そのうち、自分で作れるキットがあることを知った彩香は彼氏へのプレゼントにしようと一つ作ってみたのが、ナイフ作りの最初だっ

た。わからないところは店の店長が教えてくれた。出来上がったナイフはごくありふれたものだったが、店長がいたく気に入ってくれて、その後、店長の手ほどきを受けながら、ナイフ作りの世界へとのめりこんでいった。
注文や販売はその店がバックアップしてくれたので彩香はますます、ナイフ作りにのめりこんでいった。
彩香のナイフがとてもよく切れるのには理由があった。実地試験をしていたからだ。
つまり、彩香は自分の作ったナイフで人を試し斬りしていた。
彩香が始めて人を切ったのはいつのことかもう覚えてはいなかった。ただ、大学を卒業する年に子宮癌を患った。早期だったが、子宮全摘出。
そして、彩香は女でなくなった。無論男でもない。人間でもなくなったと感じた。
心のどこかにぽっかりと穴が開いたようだった。その穴に何かが入り込んだ。そう何か得体の知れないものが。
それに気が付いたのは病院を退院して三ヶ月ほどしてからだった。あるはずのない生理前のイライラや不快感。痛みこそなかったが、なにかを体が求めているようだった。
数日は我慢していたが、ある日の夜、彩香は自分の感覚が薄くなっていくのを感じた。まるで体と魂が離れていくような。けれども、体は彩香の意志に関係なく動き続けた。
暗い夜道を女が歩いている。さやかの右手には自らの作ったナイフが握られていた。
すれ違いざまに女の首筋に一条の光が走った。女は声も上げずにその場にたたずむ。首から赤い血が噴出すのを彩香の魂がぼんやり見つめていた。
それからは月に一回はそんな状態が続き、彩香は心に開いた穴にすむ鬼に支配されてしまったことを実感するのだった。
謎の男の子に会った次の日。彩香はまたあの公園に来ていた。昨日

座ったベンチに腰掛けて辺りを探る。
「お姉さん、また来たね」
声のほうに振り返るとベンチの端にちょこんと座っている男の子がいた。
「あなた何者？」
「僕？そうだな・・・正義の使者かな」
笑いながら男の子は答えた。
彩香は腰のポーチに手を入れて自分の作ったナイフを取り出す。次の瞬間、男の子の姿はなかった。
「どこ、どこに行ったの」
「僕はここだよ」
声はさっきと反対のほうから聞こえる。
「そんなに殺気立たなくてもいいよ、お姉さん」
男の子はベンチのの反対側に座っていた。
「僕はお姉さんの焔に興味があってきただけだから」
「焔？」
それが何のことなのか、まだ彩香にはわからなかった。

次章

「順を追って説明するから、その物騒なものはしまってくれないかな」
男の子はそういうとナイフを指差した。
彩香はまだ得体の知れない男の子にナイフを向けていた。男の子は手を前で合わせて、拝むようなポーズをとった。
「お姉さんには何の危害も加えないって約束するからさ」
彩香は静香にナイフをポーチにしまった。
「よかった、これでやっとお話が出来るね」
「話ってなに？」
「早々、まずは焔から。焔っていうのは火の塊みたいなものなんだ」
「火の玉のこと？」
「半分正解で半分間違い」
「なにそれ」
「焔っていうのは人が人を殺すと殺した人の体の周りに現れるんだ」
「えっ、な・・なにそれ」
彩香の表情が硬くなる。男の子は悪びれもせず話を続けた。
「別にお姉さんのことを悪く言っているわけじゃないよ。昔からそうなんだ。でね、焔の付いてる人を焔人と呼ぶんだけど、僕はその焔人を探しているんだ」
「何で探すの？」
「焔を食べるために決まってるでしょ」
「食べる？」
男の子はニコニコして答えた。
「そうだよ。焔を食べないと僕、消えちゃうから」
「消える？」
「僕は式神なんだ」
彩香はぽかんと口を開けて男の子を見つめた。

「式神ってなに？」
今度は男の子の口がぽかんと開いた。
「えーと、陰陽師ってわかる？お姉さん」
「知らない」
男の子は頭を抱え、髪の毛をかきむしった。
「えっとね・・・昔の日本にいた御まじないをする人が陰陽師で、まじないで作られたのが式神。わかる？」
「なんとなく・・・」
「式神にも2通りあって、紙に呪詛を施したものと、物に呪詛を施したもの。僕は物の方だけど」
「ふーん」
彩香はわかったようなわからないような感じだった。
「お姉さん、ちゃんと聞いてよね。普通、式神は陰陽師が亡くなると消滅するんだけど、僕は焔を食べることで今まで生きてきたんだ」
「今までって、どのくらい前から？」
「大体、千年ぐらい生きてる」
「千年？そんなわけないでしょう」
彩香は顔の前で手を振った。
「まあ、式神だから生きているというよりも動いているといったほうが正しいのかな」
男の子は顎の下に手をやって、つぶやくように言った。
彩香はそんな男の子を見て微笑ましくなったのか少し笑ってしまった。
「で、その式神さんが私に何のようなの？」
男の子ははっとした顔で答えた。
「そうだ、忘れてた。実はお姉さんにも焔があるんだけど、色が珍しいなーと思って声をかけたんだっけ」
「色？」
「そう、焔にも色があるんだ。どんな風に人を殺したかで色が変わるんだ」

「私の焔は何色なの」
「紫色」
「それって珍しいの？」
「僕は始めて見るよ」
「他にはどんな色があるの？」
「赤や黄色、青、緑なんかがあるよ」
「赤い色はどんな殺し方をすると出来るの？」
男の子はベンチから足を投げ出して、ぶらぶらと動かした。
「色はね、喜怒哀楽によって変わるんだ。喜は青色で殺し屋とか軍人なんかに多いんだ。怒は赤色でヤクザみたいなのに多いかな。哀は緑。自分の身代わりに人が死ぬ時に出るんだけどあんまり多くない。最後に楽。これはいじめたり騙したり、とにかく悪いことをして人を殺すと出てくる。結構多いんだ」
「じゃあ、私の紫色は何？」
男の子は少しモジモジしながら答えた。
「たぶん、『焔喰い』だと思う」
「焔喰い？それ何よ」
「僕もよく知らないけど、何でも鬼の焔を食べるらしい」
「鬼？私そんなもの食べたことないわよ」
男の子は背中に背負っていたリュックを下ろし、その中から古い本を取り出して説明を始めた。
「ここに手を置いて」
それはテレビでよく見る昔の書物だった。藍色の表紙が紐で閉じられていて、別の白い紙になにやら題名のようなものが書かれているが、彩香にはそれは読めなかった。
「さあ、早く手を置いて」
「わかったわよ、これでいいの」
彩香はその本の表紙に手を置いた。そして、男の子はその上から自分の手を添えて口の中でごにょごにょと何かをつぶやいだ。
一瞬、自分の体が宙に舞ったのかと錯覚する彩香だった。周りの景

色は薄暗い霧のようなものに変わっていき、今自分が何処に居るのかさえわからなくなっていた。
「これはこれは遠路はるばる、ようこそ御出でになられた」
少し声の高い男が目の前に立っていた。

参章

目の前に現れた男は色白で細身。背は彩香よりも少し高いくらい。神主のような、まあ、それに似た白い着物を纏っている。頭には烏帽子のようなもの。手には笏(しゃく)。まるで平安朝の貴族そのもの。

「ささ、こちらへどうぞ」

その男に案内されるままに廊下のようなところを歩いている。

「あなたは誰なんですか」

彩香は強い口調で聞いた。

「まあ、こちらでゆっくりとくつろいでくだされ」

見ると、目の前にある部屋の中に座布団のような敷物のような物が置かれている。

男はゆっくりと座り、手招きしている。

「まあ、立って話をするのも疲れよう。ささ、こちらへ」

彩香はその男の言う様にそこへ座った。

「まずは突然の誘いの無礼をお詫びいたします。私は卜部清里と申すもの。そなたの生まれる前の時代、平安の世に生きていた者でございます」

「平安？千年も前の人がなぜここに？」

卜部清里と自己紹介した男は笑みを浮かべている。

「いやいや。これは気の強そうな女子じゃ。簡単に説明するならば、私はすでに死んでいる者であり、呪詛によって本の中に残る残留思念のようなものです。あなたが手を添えたあの本です」

「幽霊？」

「まこと、面白いことを言う女子じゃ。名はなんと申す」

「名前。名前は佐々木彩香」

「ほう、彩香殿か。いやいや、やっとであった」

「やっと・・・なに」

「そなたが焔喰いということは私の式神から聞いたと思うが、私は

そなたが現れるのを今か今かと待っていたのだ」
「待っていたって・・・なぜ」
「もうすぐ、そなたの時代に悪しき影が現れる。それはこの世を混沌に満ちたものにするものだ。今はまだ封印が解けていないが、もうすぐ、それも解け、おぞましいものがそなたの世界に這い出していく」
「おぞましい？封印？あなた千年前の人間でしょ。何でそんなことがわかるの？」
卜部清里は少し暗い顔をした。したように見えた。
「悪しき物の名前は『蝕』と呼ばれているものだ。形などはなく、あえて言えば影。そなたの前に焔喰いとなったものが、彼の地に封印したものだ」
「私の前にも焔喰いがいたの？」
「悪しき物が現れると、焔喰いが現れて、これを封印する。太古の昔から延々と続いていることだ」
彩香はネットが氾濫し、電話がケイタイに変わった自分の世の中に、昔の妖怪が現れるなんて信じることも出来なかった。
卜部清里は「蝕」について彩香に語り始めた。
最初は人が人を殺すことで現れる焔についてだ。焔とは人の魂が炎の形に具現化した物。人を殺せば殺すほど殺した側の体の周りにまとわり付く。
ある程度の数の焔が集まると飢餓が生まれる。そして、焔人同士での殺し合いに発展する。
焔の数が１０８を超えるとその色が黒く変色する。これを「鬼成り」という。
「鬼成り」になると焔はますます、飢餓がひどくなり、宿主を食らいはじめ、最後には黒い焔だけが残る。これが「蝕」である。
「蝕」は他の人に取り付き、その身を食らう。
「蝕」になった焔を倒すすべはない。「双面の鏡」というものに封印するしかないのだという。

話を聞いていた彩香は卜部に尋ねた。
「黒い焔は大体わかったけど、私の紫の焔は何なの？」
「まあまあ、せっかちな女子よのう。それはこれから話すつもりでおったのに」
卜部は苦笑しながら話を進めた。
「焔喰い」が喰う焔とは「鬼成り」の黒い焔だ。喰うといっても口でバリボリと喰うのではなく、刃物によって焔と人とのつながりを絶ち、刃物を通して自らの焔に変えることだという。
そして、出来た紫の焔を使って作り出すのが「双面の鏡」であり。これは合わせ鏡のことであり、そこには無限の空間が閉じ込められていて「蝕」を封印することが「焔喰い」の使命だと卜部は言った。
一通りの説明が終わったあと、彩香は卜部に向かって不機嫌な顔で言った。
「で、私に何をしろというの」
卜部は困った顔で答える。
「だからの、『蝕』を見つけ出して封印して欲しいのだ」
「じゃあ、私が殺していた人は何なの？」
「あれは『鬼成り』だと申したではないか」
「うーん、まだよくわかんないなー」
「詳しいことは式神の持っている本に書いてある。それを読めばわかるはずだ」
「だから、あの本に書いてある宇宙語みたいな文字は私にはわからないんだってば」
「なんと、宇宙語なんぞではない。れっきとした日本語だ」
「私あんまり頭よくないから、日本語でも古くなるとわからないんだよ」
依然、困った顔の卜部だったが、不意に顔をほころばせた。
「そうじゃ、そうじゃ、忘れておったわ。焔玉を渡せばいいのだった」
「焔玉？」

「前の焔喰いが身に着けていたもので、代々の焔喰いの記憶が封じ込められた宝玉だ。京都にある御霊神社の境内にある烏石の中に封じてある。そなたの刃物を当てれば中から取り出せるはずじゃ。すぐに行って取ってまいるがよいぞ。さすれば、後の事は本を読めばわかるはずじゃ」
卜部は満面の笑みで煙の彼方に消えていった。私はまた霧に包まれたあと、あのベンチの前に戻っていた。
「ちぃ、食えないおっさんだな」
彩香は思ったことがつい口に出てしまった。
本の世界から戻った彩香は目の前にいる式神の男の子に名前を聞いた。
すると「そんなものないよ」と笑いながら答えた。それでは何かと都合が悪いから彩香は思いついた名前で式神を呼ぶことにした。
「今日からあなたの名前はナオキにするわ」
「へー、ナオキか。いいねそれ。うん、いいな」
「で早速だけど、京都にある御霊神社の場所、知っている？」
「うん、知ってるよ。あそこは今も道が碁盤の目のようになっているからわかると思う」
「それじゃあ、道案内をお願いするわ」
「えっ、今からいくの？」
「当たり前でしょ、今なら京都行きの最終の新幹線に十分間に合うでしょ」
「行き当たり、ばったりの人生を歩んできたの？」
ぼかっと頭を殴られる式神だった。

四章

今、目の前にいる式神のナオキは美味しそうにチョコレートパフェを食べている。
なぜこうなったのか？
彩香とナオキは新幹線に飛び乗って、京都に着いた。タクシーに乗り、ナオキの説明する住所にいった。
タクシーを降りて目にしたものはファミレスの煌々とした明かりだった。
「ちょっと、ここが御霊神社？」
「そうだよ」
「そうだよじゃないでしょ。これのどこが神社なのよ」
「しょうがないよ。千年もたてばいろいろと変わっちゃうからね」
「あんたこのこと知ってたの？」
「千年も生きてるといろんなところに行くからね」
「じゃあ、烏石はどこにいっちゃったの？」
「知らない。それよりもパフェが食べたいよ、お姉さん」
「何がパフェよ、まったく」
夜も更けてきた。こんなところで言い争ってもしょうがないと思い、彩香達はファミレスに入っていった。
店員の女の子が笑顔で二人を迎える。
「いらっしゃいませ。お二人でよろしいですか？御煙草はどうなされますか？」
なんだか、無性に腹が立ってきた。
「ねえ、ナオキ。これからどうするのよ」
パフェを食べ終わったナオキは満足そうな顔をしている。
「わかんない」
「あんた、その烏石ってやつを守っていたんじゃないの？」
「べつに」

頭を抱える彩香だった。顔を上げるとちょうど珈琲の御代わりを注ぎに来た店員と目が合った。
「ちょっと聞きたいんだけど」
「はい、なんでしょうか？」
夜のファミレスには似合わない清楚な感じの女の子。
「ここに、昔、御霊神社っていうのがあったらしいんだけど知らない？」
「さあ、上御霊神社ならもう少し上がったところにありますが・・」
彩香はナオキに向かって問いただした。
「ねえ、もしかしてあんたの記憶違いじゃないの、ここは」
「そんなことないよ。確かに場所はここだもの」
彩香は店員に続けて聞いた。
「烏石って知らない？」
「烏石ですか」
少し考え込むようにして店員は答えた。
「私自身は京都の出身ではないので関係あるかどうか知りませんが、昔、私の先祖が烏石をこの京都で御守りしていたと聞いたことがあります」
「それほんと？」
「はい、そのせいなのか知らないのですが、私の苗字は烏守というんです」
なるほど、名札にも「烏守」の文字が書かれている。
つまらなそうにしていたナオキが何かを思いついたようだ。
「ねえ、お姉さん。もしかして、体のどこかに痣がない？」
びっくりしたのは烏守と名乗る店員のほうだ。
「なに、急に。あの・・・」
「ねえ、あるの？」
「・・・あるにはあるけど」
「もしかして、三本の足跡みたいな」
「何でそれを知っているの」

彩香は黙って2人の会話を聞いていたが、徐にナオキの頭をぽかりと殴った。
「わけのわからないナンパなんてしてないで、説明しなさい」
ナオキは頭をさすりながら彩香に説明を始めた。
「たぶん、烏石はこのお姉さんの体に封印されているんだと思うんだ」
「封印？」
烏守と彩香は大声を上げた。
「何のことが説明してくれませんか？」
今度は烏守が険しい顔で尋ねた。
彩香は自分の鬼成り狩り以外をかいつまんで説明した。
彩香の説明を聞いていた烏守は時計をちらりと見て言った。
「あと、１０分ぐらいで仕事が終わるのでそのあともう少し詳しく聞かせていただけませんか？」
彩香たちは頷いた。
１５分ほどして烏守は黒いワンピースに黒のカーディガンといういでたちで現れた。
「お待たせしました。改めて自己紹介を。私は烏守美紀といいます」
彩香は慌てて姿勢を正し、それに答えるように自己紹介をした。
「え、私は巫と書いてかんなぎ、巫　彩香」
「巫女と何か関係があるのですか？実は私の実家は神社なんですよ」
「いや・・・何の関係もないと思うよ。ごく普通の会社員の娘だから」
「そうなんですか・・・それにしても珍しい苗字ですね」
「子供の頃はよくそれでいじめられそうになったけれど、返り討ちにしてやったらそれ以来、友達も出来なかった」
「なんか複雑ですね」
美紀は腕組みをして頷いていた。
「それはそれとして、ナオキ、どうするの？」
ナオキはあくびをしながら言った。

「僕は知らないよ。主人の卜部清里様は石を人の体に封印するなんて出来るはずないよ。そんなに有名な陰陽師じゃなかったし」
「じゃあどうするの」
そこに口を挟んできたのは美紀だった。
「私の家というか神社に古くから伝わる歌があるんですが、聞いてくれますか？」
やたさん、やたさん、どこ行くの
神さんの使いで都まで
やたさん、やたさん、都の着いたら何するの
火雷神をお隠し申す
やたさん、やたさん、かくれんぼ
錠の足跡一つ常世に残す
やたさん、やたさん、鍵はどこ
鍵は焔の剣なり
刺して引けば扉が開く

「こんな、歌なんですが」
「やたさんってもしかして八咫烏のこと？もしかして、これって、封印の開けかたじゃないの」
ナオキは喜々としていった。
彩香は頭を抱えていった。
「じゃあ、錠はどこにあるのよ」
「だから、美紀お姉さんの痣だと思うよ」
「ちょっと待ってよ。もしかして、私のナイフで痣を刺すということ？」
「そうそう」
ニコニコしてナオキは言った。美紀は少しうろたえている。
「ナイフで刺すんですか？」

五章

「大丈夫だよ。封印を解くだけだから」
美紀は彩香をじっと見ている。
「だいじょうぶなの？」
そう言って、彩香はナイフを取り出した。ナオキは笑っている。
「じゃあ、ほんの少し先端を当ててみるだけども試したら」
「ほんのちょっとだけならいいか」
彩香は美紀にナイフをむける。美紀は慌てる。
「ちょっと待ってください。そんなナイフで刺されたら痛いじゃないですか」
ナオキと彩香はその言葉に笑いがこらえきれなくなった。
「美紀お姉さん、覚悟を決めて。痣はどこにあるの？」
「痣はここなんだけど」といいながら右腕の袖をまくった。
そこには三本の線が松葉のようになっている痣が現れた。
「じゃあ、いくよ」
彩香はナイフの先端を痣に当てた。ナイフは皮膚の中に引き込まれていく感覚。美紀は痛みを感じてはいない。もちろん、血も出ていない。
「だいじょうぶ？」
「大丈夫です」
美紀が答える。
しばらくすると刃先に何か硬いものが当たる気がした。彩香はそっとナイフを引き出した。ナイフの先には黒いガラス上の玉がくっついて出てきた。
「それそれ」
ナオキが叫んだ。
「それが烏石だよ」
烏玉は綺麗に二つに割れて、テーブルの上の落ちた。中からは紫色

の勾玉が出てきた。ナオキが行った。
「それが焔玉だよ」
彩香はそれを手に取った。ほのかに暖かい温もりを感じた。次の瞬間、頭の中に次々と映像が浮かんだ。それは彩香の見たことのない時代のもの。そのすべてが彩香の中に染みこんでいく。気が付くと勾玉は消えていた。その代わりに手の平には炎の模様が浮かび上がっていた。
「なるほど、これが焔玉の力ね」
ナオキは興味心身に彩香を覗き込んだ。
「お姉さん、どうどう？」
「大体のことはわかった。つまり、私の力で鬼成りや蝕を退治したり、封印すればいいのね」
その様子を見ていた美紀は目を輝かせている。
「どうですか？私も神社の娘だから陰陽師には興味があるんです。よかったら私にも何かお手伝いさせてください」
「そうね・・・次にすることといえば、双面の鏡を見つけ出すことかしら」
「鏡？」
「何でも、蝕を封印するための道具で私の焔で作るんだけど、それにはオリジナルの鏡が必要なの」
「でもその鏡はどこにあるの？」
「美紀さんがさっき言った場所よ」
「私が？」
「上御霊神社の御神体の一つ。歌にも出てきた火雷神。それを鎮めるために奉納されたもの」
「待ってください。それって、簡単に手に入らないじゃないですか」
「大丈夫、これから行って、ちょっと借りてくればいいんだから」
彩香はナイフをしまうと席を立ち上がった。
夜の神社はひっそりとしている。ましてや、鎮守の森がある古い神社は格別な静けさがある。

ただし、それは一般の人々に関してだけだ。
意外と知られていないことだが、神社の境内は聖域であっても、結界などで悪しき物が入れないようにはなっていない
人が目に見えない神をあがめるための施設であって、神の住処ではないからだ。
彩香たち三人はそんな夜の上御霊神社にいた。
「大丈夫なんですか？こんな、夜中に」
心配そうな美紀が彩香に聞いた。
「大丈夫。確か本殿はこっちだったかな」
途中いくつもある扉は彩香のナイフでいとも簡単に開いてしまった。
「あの、そのナイフって何でも切れるんですね」
美紀が彩香に聞いた。
「大体のものは切ることが出来るみたいよ。ただ、ナイフで切るというより、ナイフにまとわり付いている私の焔のお陰だと思うけどね」
彩香は焔玉を手に入れてから、自分の焔を見ることが出来るようになった。まるで自分の体が燃え上がっているかのようにまとわり付く紫の焔。
最後の扉を開くとそこにはいくつかの御神体が置かれていた。
「えっと、これこれ」
彩香は青緑に錆びた丸い物体を手にした。それは表も裏も模様が刻まれた鏡状のものだった。普通、鏡の一面は平面になっているがそれはそうではなかった。
「お姉さん、来たよ」
ナオキが彩香の服の端を引っ張っていった。
「早速のお出ましか」
彩香は鏡を美紀に手渡して、建物の外に出た。
外は不気味な静けさだった。遠くから聞こえるはずの車の音も聞こえてこない。
不意にガサガサと音がした。

「来たよ」
ナオキが指差すほうを見ると何かが動いた。あまり大きくは無さそうだが、一匹ではないようだ。
「ナオキ、あんたは美紀さんとここに居なさい」
「はーい」
彩香はバックから小型のナイフを取り出した。
「火は黄泉の熱き息吹なり」
彩香はそうつぶやくとナイフを投げて、地面に突き刺した。
「水は天空の恵みなり、土は大地の力なり、木は盛名の息吹なり」
彩香は次々とナイフを地面に突き刺した。
「雷は神の御言葉なり」
5本のナイフを地面に突き刺すと彩香たちを囲んで五芒星が現れた。
それぞれのナイフを頂点とし紫の炎の線で結ばれている。
「みんな動かないで」
彩香はそう叫んだ。
周りの暗闇からはぞろぞろと何かが這い出てきた。それは猫ほどの大きさの鼠のような生き物で顔だけは人のようにも見えた。
「お姉さん、これ蝕だね」
「間違いないわね。美紀さん、ちょっと鏡を出して」
美紀は胸の前で鏡を手の平に載せた。彩香はその鏡の上に手を載せて、呪文を唱えた。
鏡が金色に輝きだす。彩香が手を上に動かす。鏡から金色の光だけが吸い取られるように持ち上がった。光が消えた。彩香の手の中にはもう一つの鏡があった。
「さてと、美紀さん、もう少しここで我慢していてね」
そう言うと彩香は五芒星の結界の外に出た。
とたんに鼠の化け物が襲い掛かってくる。彩香は手にしたナイフでそれらを切りつける。
しかし、一度切れたはずの鼠どもはすぐにもとの形に戻り襲ってくる。

彩香は鏡を両手で持って別な呪文を唱えた。
「空蝉の世の支配者よ。ここに供物を与えん。天は天、地は地、狭間に漂う焔の光。いざ、ここに扉を開かん」
鏡の側面に一条の光の筋が現れて、二つに割れた。
鼠の化け物は吸い込まれるようにその隙間へ飛び込んでいく。最後の一匹が吸い込まれると鏡はまた元通りの一枚になった。

終章

「やれやれ」
彩香は言った。そして、元に戻った鏡を美紀の持っている鏡に重ねてまた、呪文を唱えた。
「虚空の世の管理者よ。ここに禍物を与えん。雷は雷、火は火、水は水、永遠の狭間に群がる魍魎。いざ、ここに扉を閉じん」
再び、鏡は光りだしもとの一つの鏡になった。
「完了」
「やれやれだね、お姉さん」
ゴツンと大きな音がした。
「何がお姉さんだ」
彩香は思いっきりナオキの頭にげんこつを落とした。
「え、いや、気が付いてたの」
「当たり前でしょ。焔玉が戻れば記憶も戻ることぐらいあんたも知っているでしょ」
「そりゃそうだけど」
横で美紀が目を丸くしている。
「美紀さんごめんね。改めて紹介するね。こいつはナオキことアマテラス。そして私がツキヨミです」
「アマテラスってあの天照大神のこと？」
「半分当たり」
「半分？」
「正確に言うと神であるアマテラスが子供を依り代にしてこの世に出てきた、というのが正解かな。私は焔玉を依り代にしてこの世に出てきたから、ちょっと違うけど」
「どう違うんですか？」
「人を依り代にすると不老不死になるの。物を依り代にすると生まれ変わりが身に着けることで力が発揮されるのよ。無論、人として

の寿命しかないからあなたと同じように歳もとるんだけど」
美紀は2人の顔を交互に見つめながら頷いていた。
「私の場合、生まれ変わるたびに記憶がなくなるから、アマテラスはそのたびに面白がっていろいろといたずらするのよね。今回のことも全部知ってて、私をあなたのところに連れてきたのよ」
ナオキことアマテラスは頭をさすりながら、彩香ことツキヨミに向かって言った。
「だって、面白いんだもの。ところで、八咫烏はどうした？」
「え、あんたが持ってるんでしょ」
「僕持ってないよ」
「まさか、あのファミレスに置いて来ちゃったの？」
すると美紀が二人に向かって言った。
「八咫烏って、もしかして、あの黒い石のことですか？」
「そうそう」
「それなら、私が二つに割れた石を一つにあわせたあと、消えてしまいましたけど」
「消えた？」
「はい」
美紀は軽やかに答えた。
「どうするの、アマテラス」
「どうするって、どうしようもないでしょ」
「八咫烏が憑いたらどうなるの？」
彩香がナオキに聞いた。
「まあ、神ではないから別に大事にはならないけど・・・」
「けど・・・なに？」
「烏だから空を飛べるようにはなるかも」
「空を飛ぶ？」
大きな声を出したのは美紀だった。
「試しに飛んでみたら」
ナオキが言った。

「どうやって飛ぶのかわからないわ」
美紀が答えた。ナオキは指で背中を指しながらいった。
「こう、背中に意識を集中するといいよ」
「こう？」
美紀の背中で何かがうごめきだした。それは次第に大きくなって黒い翼になった。
バサバサ
何度か翼を羽ばたかせると美紀の体はまるで重さがなくなったように宙に浮かび上がった。
「飛べた！」
大喜びの美紀だった。彩香は頭を抱えて苦笑した。
「ツキヨミ、これって使えるよ。うん。美紀お姉さんにも手伝ってもらおうよ」
「そんなことといっても。美紀さんに迷惑がかかるかもしれないし」
「私大丈夫です。御二人のお手伝いをさせてください。ところで、お手伝いって何をするのですか？」
「そうね、さっきのように蝕を捕まえて、その鏡に封印することかな」
彩香はそう説明した。美紀はガッツポーズをして「がんばります」といったが、実はこの三人のお話は始まったばかりだった。
この世に発生している蝕はまだまだ、いっぱいいる。昔から魑魅魍魎とか妖怪とか物の怪と呼ばれているものたち。そして、蝕になる前の鬼成りを狩っていく。
彼らの蝕を封印する旅が今、始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6006p/

焔喰い（ほむらくい）

2010年12月31日07時38分発行